

# 美をつくし

大阪市立美術館だより

平成28年3月1日発行



めいひしゆっさいす  
重要文化財 明妃出塞図(部分) 宮素然  
金時代・12-13世紀 本館蔵(阿部コレクション)

明妃とは王昭君のことをいい、漢の元帝の時代、匈奴の王に妃として贈られた悲劇の美人として知られている。本図は異民族風の衣装に身を包んだ明妃の一行が塞外の地へむかう様子をえがく。彩色を施さず繊細な線描でえがきだされた明妃の姿からは、複雑な胸中の想いが伝わってくるかのようである。

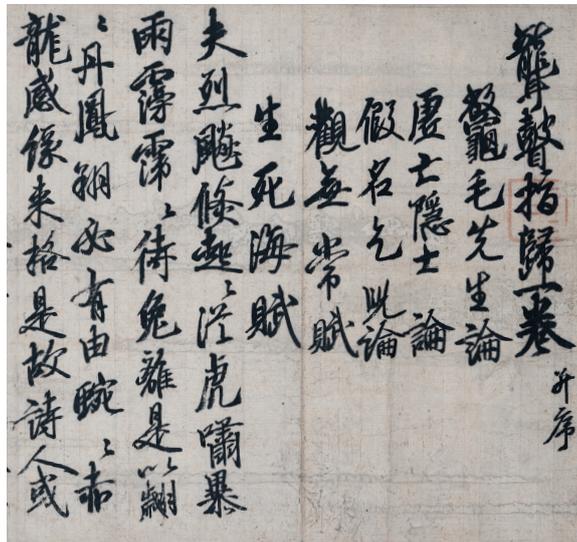
大阪市立美術館開館八十周年記念  
公益社団法人日本書芸院創立七十周年記念

# 王羲之から空海へ一日中の名筆 漢字とかなの競演

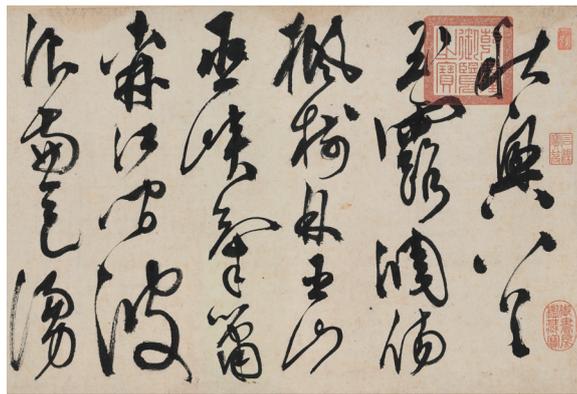
2016年4月12日(火) — 5月22日(日)



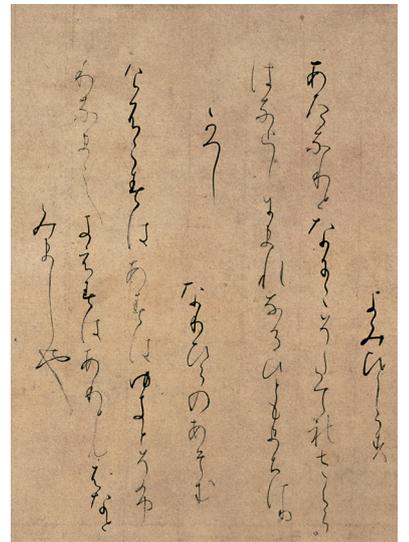
1



2



3



4

1. 王羲之「蘭亭序(開皇本)」(部分)  
東晋・永和9年(353) 東京国立博物館  
Image : TNM Image Archives
2. 国宝 空海「鐺髻指歸」(部分)  
平安・延暦16年(797) 和歌山 金剛峯寺
3. 陳淳「草書杜甫秋興詩」(部分)  
明・嘉靖23年(1544) 台北 國立故宮博物院
4. 重要文化財 伝紀貫之「高野切第一種」(部分)  
平安・11世紀 福岡 石橋美術館

本年、大阪市立美術館は開館八十周年を迎えます。これを記念して、日中の名筆を一堂に集めた展覧会を開催します。

関西地区では、王羲之を中心とする法帖やその流れをくむ作品を学んで一家をなす書家が多く、また日本の書法史も王羲之の書法をもとにして独自の発展を遂げて来ました。そこで本展では、王羲之以来の書法の伝承を中国・日本それぞれの名品によって回顧します。

中国書蹟では、王羲之「孔侍中帖」、王獻之「地黄湯帖」の双鉤填墨や「集王聖教序」「蘭亭序」の精拓から始まります。唐では天下の孤拓たる虞世南「孔子廟堂碑」、褚遂良「孟法師碑」や欧陽詢「九成宮醴泉銘」(海内第一本)といった教科書でもお馴染みの初唐三大家、蔡襄・蘇軾・黄庭堅・米芾の宋四大家が勢ぞろいします。さらに元の趙孟頫、明の祝允明・文徵明・董其昌らを経て明末清初の王鐸らに至る大家の作品約90件を展示します。

日本書蹟では、中国から筆法が伝わった飛鳥・奈良の写経を皮切りに、三筆では空海「鐺髻指歸」「風信帖」「灌頂歴名」や嵯峨天皇「光定戒牒」など、三跡では小野道風「三体白氏詩卷」、藤原佐理「国申文帖(女車帖)」、藤原行成「後嵯峨院本白氏詩卷」などが

集まります。そして「高野切」「寸松庵色紙」「継色紙」といった平安古筆の数々を経て江戸時代に至る約120件が出品されます。

また篆刻では、戦国秦漢の古璽や、呉昌碩・徐三庚など清末民初の優品約20件を陳列。あわせて数多くの国宝や重要文化財を含む約230件が揃います。

さらにこのたびは、台湾からも名品を迎えることができました。中国の書では世界最高の質量を誇る国立故宮博物院に、まず貴重な宋の四大家の作品各一件をお願いしました。元の趙孟頫が師の中峰明本に宛てた書信は、日本の静嘉堂文庫美術館蔵の国宝とともにご覧いただけます。日本では真蹟が希少な沈周・祝允明・文徵明・陳淳・王寵といった明代の巨匠たちは名立たる代表作を選びました。いずれも初来日の作品です。明清の書のコレクションが豊富な何創時書法藝術基金會からは、張瑞図・黄道周・王鐸・傅山などの明末清初の名品・珍品が来日します。

(弓野 隆之)

作品リスト・展示期間については当館ホームページをご覧ください。

## 美術館小史



図1 天王寺公園(『明治大正昭和の大阪写真集5』より)

天王寺公園の航空写真(図1)です。左手には鉄道の線路が走り、中央を一直線に走る道路の右手の区画、公園の北側には庭園とその西奥に建設中の大きな建物の鉄骨が見えます。道で隔てられた南側の区画にはすでに整備された公園があり、その奥には立派な洋館が建っています。洋館は明治三十六年(1906)内国勸業博覧会の開催にあわせて建てられた美術館の建物(市民博物館として転用)です。写真の南半分は平成二十七年秋に整備されて「てんしば」として生まれ変わった場所です。一方、北半分に見える建築中の建物は現在の大阪市立美術館、そして慶沢園です。この北側の区画は明治期から住友家の敷地であり、後に邸宅と庭園が建てられ本邸となったのですが、その後大阪市に美術館用地として寄贈された部分にあたります。

美術館を撮った写真は以前から何枚か確認していますが、建設中の写真は初見でした。これは大阪市立中央図書館にある、『明治大正昭和の大阪写真集5』(1929)に掲載されており、平成二十二年(2010)の秋に大阪市立図書館が作成した「憩いのオアシス天王寺公園今昔(いまむかし)」Webギャラリーで紹介されていました。昭和四年刊行ですから、昭和十一年(1936)の開館の七年前に撮影されていた写真ということになり、鉄骨が組まれてから開館までに七年を要したことを明らかにする興味深い写真でもあります。

大阪市は大正九年(1920)三月に美術館建設を市議会に提案し、大正十三年(1924)に開館することを決めていました。当初は大坂城址に建築することを予定していましたが、大正十年(1921)十二月、男爵住友吉左衛門が天王寺の茶白山の南側にある本邸敷地を美術館建設という条件で大阪市に寄付を申し出られたことから、現在地への建設が決定しました。

大正十一年(1922)から十二年(1923)にかけて建築、展示についての調査、準備は順調に進んだのですが、同年秋に起こった関東大震災によって建築計画は止まってしまいました。全国の自治体に先駆けて建築されるはずだった美術館ですが、再開の予定がたたないなか、住友家から大正十五年(1926)に用地が譲渡され、市議会の議決から八年を経た昭和二年(1927)度から三年計画、百万円の予算を計上し建築計画が再開しました。昭和三年(1928)一月地鎮祭を行い、七月に基礎工事、続いて鉄骨組み立てを完成させ、昭和四年

(1929)一月棟上げ、昭和五年(1930)五月にコンクリート工事を終了し、後は内外装および設備工事を残すまでとなっていました。

ところが、昭和五年に大阪市の財政上の都合により再び工事が延期されてしまいました。工事再開は三年後で、昭和八年(1933)になって漸く外装工事と屋根工事が完成しました。昭和九年(1934)度に内部設備その他を完成させる予定でしたが、その年の九月に大阪を襲った室戸台風によって大きな被害がでたため、完成は、またしても一年ずれて、昭和十年度に工事が完了し、翌昭和十一年(1936)五月一日に、計画開始から十七年をかけて落成式が挙行されました。

以上は昭和十一年に刊行された『大阪市立美術館年報』第一の美術館の沿革に書かれた内容ですが、写真は鉄骨が組みあがった頃のものなので、まさに掲載された写真集の刊行年である昭和四年頃の美術館を写したもののようです。

現在美術館の建つ北側の敷地は明治二十八年頃から部分的に住友家によって購入され、内国勸業博覧会の開催時には住友家の別邸が建てられていました。明治末年から大正の初年にかけて数寄屋風書院造の和館(図2)と洋館、土蔵などが野口孫一、日高絆の設計、八木甚兵衛の施工によって建てられ、小川治兵衛によって慶沢園が作られました。土地購入時茶白山一帯は古墳や寺院や田畑が点在する静かな郊外であったようですが、博覧会の開催とともに市街地化がすすみ、様々な要因から住友吉左衛門はこの土地を手放す決意をしたようです。そのいきさつと、建物の詳細は泉屋博古館で昨年開催された『住友春翠』の図録に紹介されています。

美術館敷地とともに寄贈された慶沢園は昭和九年から市民に公開されています。住友邸ゆかりの建物として現存するのは、撤去を急遽とりやめたという土蔵(図3)の棟ばかりです。この屋根瓦に住友の井桁の紋章(図4)があることを一昨年取材で当館を訪ねて来られた末岡照啓氏(住友資料館副館長)が発見されたことを末尾に書き添えて小文を終えたいと思います。

(土井久美子)



図2 住友茶白山本邸和館(『住友春翠』より)



図3 大阪市立美術館土蔵



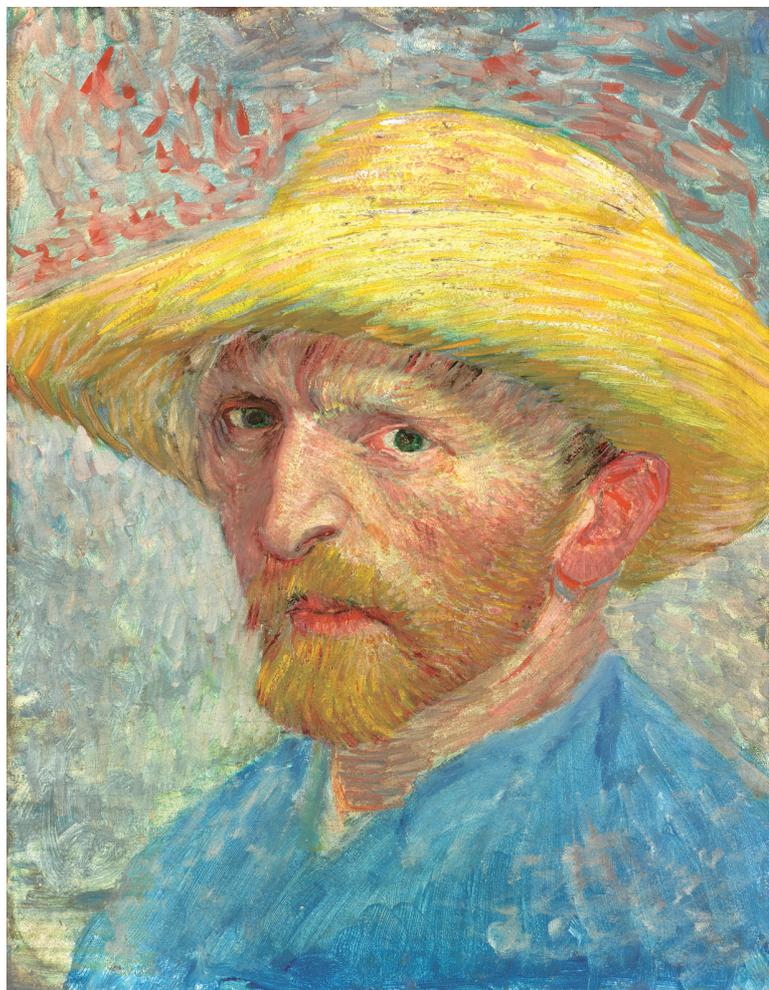
図4 土蔵の瓦

大阪市立美術館開館八十周年記念

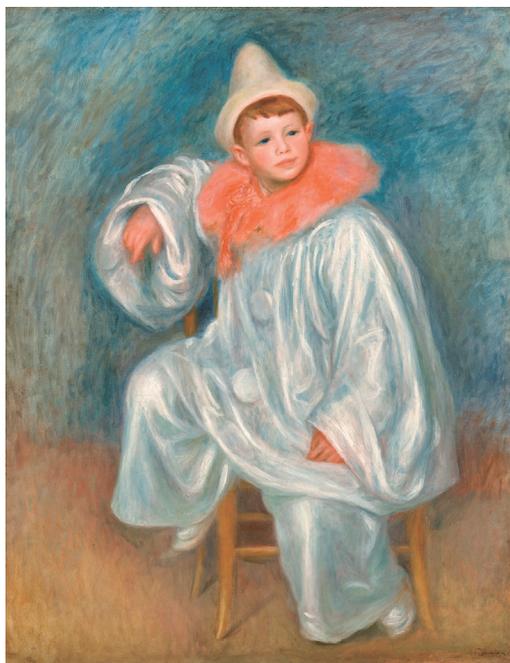
# デトロイト美術館展 大西洋を渡ったヨーロッパの名画たち

モネ ルノワール ゴッホ セザンヌ マティス ピカソ

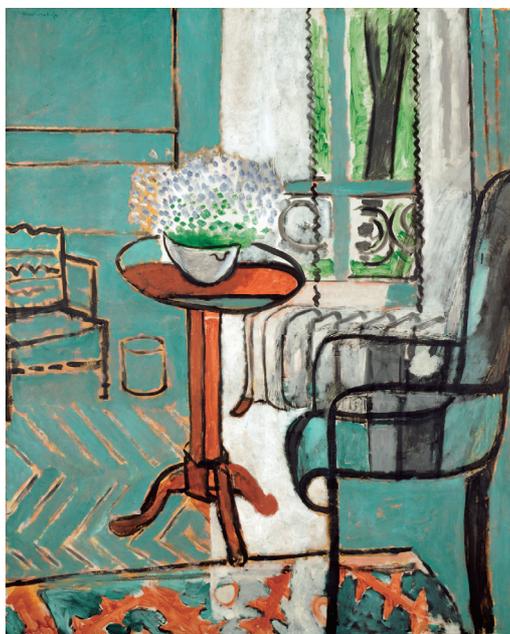
2016年7月9日(土) — 9月25日(日)



自画像 フィンセント・ファン・ゴッホ 1887年



白い服の道化師 ピエール・オーギュスト・ルノワール 1901-1902年



窓 アンリ・マティス 1916年

1885年に設立されたデトロイト美術館は、良質なコレクションと規模によって、メトロポリタン美術館やボストン美術館、シカゴ美術館などともに全米屈指の美術館として高い評価を得ています。

20世紀初頭よりデトロイトは、自動車産業の中心地、「モーターシティ」として繁栄しましたが、美術館の活動に理解を示すフォード一族に代表される多くのパトロンからの支援や、歴代の館長たちのすぐれた指導により、コレクションの総数は66,000点を超え、古代から現代まで世界の美術の歴史を概観できるほどになっています。

デトロイト市が位置するアメリカ中西部は、気候風土がヨーロッパと似たところもあり、市民はそれぞれの故国の美術的伝統を、郷愁や誇りもこめて美術館のコレクションとして積極的に取りこんできました。しかしながら、近年のデトロイト市の財政破綻により、時価総額で85億ドルと試算されているコレクション

も債務処理のため売却される危機にさらされましたが、一方で市民や周辺自治体から、美術館とコレクションを守り抜こうとする運動も強くなり、アメリカのみならず、デトロイト市の大切な文化的資源としての意義がますます深まっています。

こうした事情も踏まえて私たちは、『デトロイト美術館展—大西洋をわたったヨーロッパの名画たち』というタイトルで展覧会を開催します。なかでも、アンリ・マティスの『窓』(1916年)とともに、最初に大西洋をわたってアメリカにもたらされた自画像として知られるファン・ゴッホの『自画像』(1887年)はその代表作と言えましょう。クールベから印象派にいたるフランスの近代絵画、またドイツ表現主義など、デトロイト美術館の近代美術の傑作から選りすぐられた52点を「印象派」、「ポスト印象派」、「20世紀のドイツ絵画」、そして「20世紀のフランス絵画」のセクションに分けて紹介します。

(篠 雅廣)

## 近年の作品収集

本年、当館は開館80周年を迎えました。長年にわたり美術館の運営をご支援いただきました多くの方々に対し、館員一同、心より感謝申し上げます。

現在、当館の所蔵作品は8,400件余りに達していますが、2003(平成15)年度以降は公費による収集は行われておらず、この間の増加分698件(内訳は右の表のとおり)のうち650件は寄贈(48件は所管替)による収集作品です。美術館に寄せられたご厚意のありがたみを改めて受け止め、今後の展示、研究などに一層の活用を図ってゆきたいと考えています。引き続き皆様からご協力、ご理解をいただけますようお願いいたします。



①



②



③



④



⑤



⑥

年度	寄贈作品	件数	寄贈者名(敬称略)
2003	《石造 如来三尊像》(写真①) 他	3	上本俊平
	今村紫紅《伊勢物語図》	1	某氏
2004	《三彩 文官俑》	1	吉村芳野
	山本竟山 隷書《万歳》他	9	生駒温子
2005	《彩陶 双耳壺》他	2	大澤清
	《金地人物蒔絵 三組杯》他	49	森 知
2006	辻愛造 スケッチ・絵日記(一括)	1	寺澤清子
2007	《秋野図屏風》	1	藤田元衛
2008	《漆塗 耳杯》	1	大谷寛
	《藍地 御所解総模様帷子》他	5	大谷みちこ
2009	寺内萬治郎《裸婦》	1	森田敦子
	児玉幸雄《シシリーの人々》	1	児玉節子
2010	《染付 有職文煎茶碗・托》他	16	百瀬正明
	谷村為海 煎茶関連資料(一括)	8	谷村アイ
2011	菅橋彦《春秋浪速人》のうち「堀江阿弥陀池」(写真②)	1	近藤辰子
	河井達海《バラ》他	3	中津海茂
2012	田川勤次《麦埴》他	11	田川啓祐 田川泉二
	岡田米山人・半江《煙霞帖》他	16	望月千枝子
2013	初代徳田八十吉《色絵 花文香合》他	4	三木艶子
	富本憲吉《染付 葡萄模様筒形杯》他	100	辻本泰子
2014	和気史郎《井筒の女》他	47	前場百合野
	《色絵 唐草文変形皿 佐賀県鍋島藩窯》他	118	田原元子
2015	《根付 武悪面》他	9	野村建夫
	《青釉黒彩 水差 レイ窯》他	2	高橋元子
2016	《染付 草文皿 長崎県三河内焼》他	4	百瀬正明
	《石造 如来及脇侍立像》他	2	卯里欣侍
2017	赤羽恒男《樹海を越えて》他	2	赤羽恒太
	《燹敏碑拓本》(写真③)	1	中濱慎昭
2018	《彩漆 三魚文耳杯》他	2	江川宏
	《緑釉 耳杯》他	2	辻本泰子
2019	《三彩 女子俑》他	63	原 晃
	森田恒友《ブルーニユの風景》	1	鈴置恒子
2020	杉山寧《ミイラ木棺》	1	坪倉修吉
	石井武夫《風景》他	2	石井武夫
2021	冬木偉沙夫《いざない「阿吽」》他	2	冬木理紗男
	《色絵 双鶴文皿 有田焼・柿右衛門様式》(写真④) 他	49	岩田久子
2022	《青銅鍍金 馬飾金具》他	3	江川宏
	《袈裟褌文 銅鐸》(重要美術品)(写真⑤) 他	2	平泉為造
2023	《焼締 大甕 岡山県備前焼》	1	坂本益男
	《月白釉 鉢 欽築系》他	24	原 晃
2024	《鉄絵 魚文盤 タイ・スコタイ窯》他	20	山西敏一
	富岡鉄斎《中国故事人物図押絵貼屏風》	1	新井真一
2025	《第一回ヒュウザン会油絵展覧会ポスター》(写真⑥) 他 萬鉄五郎関係資料(一括)	10	八木正隆
	松原三五郎《高野山旧金堂之図》(スケッチ)	1	天野新一
2026	菅橋彦《桜の宮》	1	岸田卯兵衛
	《小倉山蒔絵 香筆筒》他	17	海野美里
2027	菅野繁谷《山水図押絵貼屏風》	1	牧山雄一郎
	奚岡《秋谿散策図》他	10	小池英明
2028	ブンタオカーゴ、ダイアナカーゴほか沈没船引揚陶磁器(一括)	48	港湾局より 所管替
	狩野常信《四季耕作図屏風》	1	古橋久子
2029	富岡鉄斎《紅菊図》他	8	松永武純 (囃石)
	日下部鳴鶴《行書 羅鄴牡丹詩》他	2	木村いく
2030	《五彩 魚藻文盤》(ベトナム)	1	江川宏
	田川覚三《場末の町》他	6	田川絵理

計698件

※寄贈者名は寄付申出者とは異なる場合があります。

## 肥前磁器の展開

2016年6月3日(金)ー 6月26日(日)

江戸時代から始まる日本の磁器生産は、肥前有田地方の食器類を中心に展開しました。岩田久子氏寄贈品の有田焼、田原コレクションの鍋島焼などの展示から、涼やかな染付と華麗な色絵、端正な白磁や青磁の展開をお楽しみ下さい。



青磁染付 青海波宝文皿 鍋島焼  
江戸時代・18世紀  
本館蔵(田原コレクション)

## 異郷の空

2016年6月3日(金)ー 6月26日(日)

19世紀末以降、本格的な西洋絵画を学ぶために多くの日本人画家たちがヨーロッパやアメリカに渡航しました。遙かな「異郷」で胸躍る日々を過ごした画家らの姿を思いながら、大正から昭和前半期を中心とする洋画作品をご鑑賞ください。



森田恒友 プルターニユの風景 大正4年(1915)  
本館蔵 鈴置恒子氏寄贈

## 源平物語絵

2016年6月3日(金)ー 6月26日(日)

『平家物語』や『源平盛衰記』など、源氏と平氏の戦いをテーマとした物語は広く語り継がれ、様々なイメージを生み出しました。それらは格好の画題として、多くの絵画にも描かれています。勇ましくも悲しい源平の物語絵をお楽しみください。



鈴木松年 鞍馬僧正谷(部分) 明治24年(1891) 個人蔵

## 中国四大美人!?《明妃出塞図》を読み解く

2016年6月3日(金)ー 6月26日(日)

中国四大美人にも擬せられる王昭君。その悲劇を描いた《明妃出塞図》(表紙参照)の出陳にあわせて漢代の女子俑や銅鏡、騎馬民族の習俗からうまれた帯鉤などを展示することで作品理解の一助といたします。一点の絵画から広がる中国美術の世界をどうぞご堪能ください。



灰陶加彩 女子俑 後漢時代・2世紀  
本館蔵(山口コレクション)

## 仏教美術—聖徳太子をめぐる美術

2016年6月3日(金)ー 6月26日(日)

聖徳太子(574-622)は、仏教を篤く信奉し今日まで続く仏教興隆の礎を築きました。太子が没すると日本仏教の祖として崇敬をあつめその生涯が伝説化し、大阪・四天王寺をはじめとする太子建立寺院を中心に聖徳太子信仰が形成されました。第一部では太子が使節を派遣した中国・隋の作品、第二部では絵伝など太子信仰に関わる作品をご紹介します。



聖徳太子絵伝(巻下) 江戸時代・17世紀 大阪・叡福寺

## 大阪市立美術館 天王寺公園内

Osaka City Museum of Fine Arts

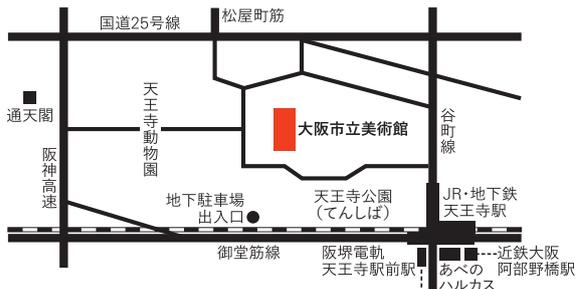
〒543-0063 大阪市天王寺区茶臼山町1-82

tel. 06-6771-4874 fax. 06-6771-4856

http://www.osaka-art-museum.jp

開館時間=9:30~17:00(入館は16:30まで)

休館日=月曜日(ただし月曜日が祝日の場合は翌平日)



交通案内: 地下鉄御堂筋線・谷町線、JR「天王寺」、近鉄南大阪線「大阪阿部野橋」、阪堺電軌上町線「天王寺駅前」下車、または市バス「あべの橋」下車、北西へ約400m